地球 第十五卷第二號 昭和六年二月

利瑪竇の坤輿萬國全圖に就て（一）

藤田元春

一、序說

利瑪竇の坤輿全圖（萬曆壬寅版）が京都帝國大學圖書館の珍藏本の中にある。その發見されたのは明治三十七年伊勢松阪の商人が之を京都帝國大學に持つてきた時のことであるが、その頃になつて外國でも之に注目するものが出來たと見え、一九一七年のGeographical Journal十月號にBaddeley: Father Matteo Ricci's Chinese World maps, 1584-1603 及 The Relationships of the Ricci Maps. By E. Heawood といふ二考證がのつた。

バッドレーによると西洋では一八七四年にユール大佐が既に原本が世にないであらうと考へ、想定縮圖をつくりジオグラフイアル・マガジンにのせたが、一九〇四年にはEttore Ricci博士が、同圖は世に現存しないとまで考定した。處が一九一一年に教父 Venturi が初めてリッチの自傳を刊行した時、ヴチカンのバーベリニ・コレクションにあつた原圖の十二分一の複寫をつくつた。勿論

このヴチカンのものを以て歐洲唯一のものと考へたのである。ところがバッドレーが英國王立地學協會の蒐集を見た所、偶然にも氏は一八五八年にロックハルト氏寄贈の全地圖一本あることを發見した。それを見ると支那文で、中に「萬曆壬寅孟秋日利瑪竇撰」とある。これは全くヴチカンの地圖と同じものである。處がこゝに伊太利ミラノの Ambrosiana 圖書館にはこれと違つた一五八四年肇慶版のリッチマップがあるといふことであつた。さしてヒーウッド氏は、この最後の二つが共に楕圓形のプロゼクションであつて、フレミッシュ派のオルテリウスの圖法によるものである。即アピアン式とも稱さるる圖法と全く同一のものであると論じた。

してみると京大圖書館の萬曆壬寅孟秋吉旦歐邏巴人利瑪竇謹撰とある坤輿全圖（六幅を以て一組とし、楕圓形プロゼクションで、アピアン圖法である）は全くバッドレーやヒーウッドの見た地圖に一致し、世界で三、四本しかない稀覯の珍書であるといふことになる。

最近に京城大學の人々が、資料蒐集にやつてきて、この京都帝國大學の珍本を、寫眞版にとつて歸つたのも理由あることである。京城大學にも近頃一本を手に入れたらしい。

京大のこの地圖は何分にも古くなつたから開舒のたびに損傷の恐れがあるから、將來はその寫眞をみせやうといふので、京城大學の人の取つた原版（今は京城大學にある）によつた寫眞を提示するといふ程に、貴重な地圖である。幸に筆者は其寫眞を見たのみでなく、大正十三年北京に行つた時、九月十五日午門の歷史博物館を訪ね、館長裘善元氏の珍藏する利瑪竇の坤輿全圖なるものを見たことがある。その際裘氏は予に圖の寫眞を寄贈されたので、これを持つて、京大の珍本に比較す

ることが出來た。

裘氏の藏品は、絹本の六幅、寫本であつて、色彩がある。さうして海や陸に、珍奇な怪獸があり船舶等が記してある。京大の刻本にはさうした小供だましのやうな繪畫がない。けれども右の絹本の文字はすべて京大のものと一致し、それにも萬曆壬寅孟秋吉旦歐邏巴人利瑪竇謹撰と書し州名から國名、註記すべて同一である。思ふにこれは利瑪竇が一六〇八年即萬曆三十五年に北京に行つた時、神宗に世界圖を進呈したところ、神宗大に喜び更に命じて絹印十二部を献上せしめたといふことであるから恐くその當時のものであるらしい、裘氏の特に之を珍藏する所以である。

一六〇八年に十二部の絹本地圖を献上したといふことは、バッドレー氏の報告にも出てゐる。それは東洋學報第八卷第一號に和田清文學士が利瑪竇の坤萬國輿全圖についてと題し紹介されてゐる記事の中にも出てゐる。予が之を裘氏から得た時は、何とも思はなかつたけれども、其後支那が亂れたから、この圖が今も午門にあるや否やも不明で、幸にその寫眞が予の手にある丈けでも珍重すべきであると思ふ。この絹本に色彩があつたり、珍奇な怪獸があるのは、神宗を喜ばすために利瑪竇が入れたものであらうと思ふ。

最近になつて大連の福田收作氏から大連の圖書館が、伊太利公使館員ロス氏が在支三十年間に蒐集した地圖を購入した記念だといつて「支那地圖目錄」を發刊したとつげ、其一本を贈くられた。早速これを見ると目錄中に坤輿全圖白耳義南懷仁編、康熙一三、一七四・五×三一〇、六幅と記したのがあるが、其外に利瑪竇の圖は見當らぬ、ロス氏三十年間の苦心を以てしても、リッチマッ

プは手に入つてゐない所と見ると、益々この京大本の有難さが身に泌むのである。

但しこの大連圖書館にある南懷仁の坤輿全圖も馬鹿にはならぬ。この坤輿全圖は平射圖法による兩半球の大地圖である。全く利瑪竇の楕圓形のアピアン地圖とはちがうものである。しかし面白いことには、その珍奇な怪獸や海船の挿入が北京のリッチマップ絹本に一致することである。予はこの本を昭和三年十二月上海に旅行した時、徐家滙の天文臺附屬圖書館で見た、其時壁にかけてあつたが、それには

「康熙甲寅(即一六七四)歲日躔娵訾之次、治理曆法、極西、南懷仁立法」(拙著尺度綜考、里と地圖參照)

と明記してあつた。而してこの圖は先年京城の學務課でみた坤輿全圖の原本であつた。京城版には「治理曆法、極西、南懷仁立法とあつて、咸豐庚申降婁海東重刊」とある。即朝鮮で咸豐庚申(西紀一八六四年)に重刻したものである。いづれこの朝鮮版については、後日發表する機會があらうと思ふ。

いづれにしてもさうした次第で利瑪竇の圖といふものは、あちらでも稀觀の書であり、支那でも容易に手に入らないものである。さうして筆者の其後の研究によれば、我國で德川時代に世界地圖を出版するに當つて、何回となくこの利氏の坤輿圖なるものが手本になつたものである。現に予の見た天明三年版(西紀一七八三)三橋釣客著の「地球一覽圖」や、嘉永六年(西紀一八五三)版の「萬圖輿地全圖」(安倍泰行著)や嘉永三年版山崎美成の「地球萬國全圖」や、年月不詳の長崎異篤館出版の「三千世界早視萬國圖」の如き五つのちがつた地圖が、いづれもその範を利瑪竇の坤輿全圖に取る

其圖式等全く一致するのであるから、本圖が日本人の海外智識に影響した點は甚だ多い。

勿論本圖は支那で最も早く出版されて、支那人の舊來の世界觀をくつがへしたものであるから、支那及日本の地理學の發達については、唯一無二の最初の世界圖であつたわけである。先賢既に多く、たとへば史學界や歴史地理誌上で、青楓生氏。阿部秀助氏。中村久四郎氏等がリッチを我國人に紹介された事であるが、予も亦驥尾に附して、本圖の示めす二三について解說をしてみやうと思ふ。

猶この際この坤輿全圖が日本に出てきて、德川時代に新井白石の「西洋紀聞」や稻垣子戩の「坤輿全圖說」等にいちはやく解說されてゐたことを報告し、併せて德川時代に傳はつた「世界地圖」について一言をしておきたい。

二、德川時代に傳はつた世界地圖

畏友牧野信之助氏の「世屏風圖考」(內藤博士頌壽記念論叢)によると、我國には、この利瑪竇の地圖とはちがつた、世界地圖が餘程古く日本に傳來したらしい。現に大日本史料十二ノ八、慶長十六年九月廿日の條に、

駿府記…九月廿日、南蠻世界圖屏風有御覽而及二異域國々之御沙汰一

とあるをひき、家康が世界圖を見たとしるし、その參考として、越前福井市川上町淨得寺にある世界圖屏風一雙の寫しをのせてゐる。さうして史料の解說ではこの圖は狩野永德の筆であるといふが年代は合しない。けれども其記事からみて、この圖の年代が慶長から元和寛永頃のものであらうと

しるしてゐる。そこで牧野氏はこの史料の說をそのまゝ鵜飲みにして、この淨得寺の圖を慶長元和頃に日本で出來たものであらうと贊し、同時に小濱の河村平右衛門所藏の世界圖。若狹發心寺の世界圖及東京本郷北村敎嚴氏所藏、傳家光の枕屏風等を列擧していづれも全時のものであらうと論じてゐられる。但しこの最後の原本は、震災に失はれたが、辻善之助博士の「海外交通史話」のうちに寫しが出てゐる。それと史料の圖とを比較すると全くプロゼクションが一致して、メルカトル圖式に類似した圓柱投影でかゝれてゐる、いかにも古い世界圖らしい。

牧野氏は專門が歷史であるから、さうした圖式の異同といふことを考へられなかつたので、淨得寺の屏風が楕圓の大廓の中に、圓柱投影法(經緯線が直線である)で書いてあるのを見ながら、利瑪竇の地圖が楕圓の中にアピアン式又はオルテリウス式で(經線が彎曲してゐる)かいてあるといふ非常な差のあることを無視し、たゞ外貌が似てゐるといふ點から、同論文の中に、圖式系統といふ一項をあげて、しかも些しもこの圓柱投影法であるかアピアン楕圓式であるかといふやうなことを論じないで、直ちにこの淨得寺の世界圖の原本として第一に利瑪竇の圖を擧げられてゐる。しかしそれは大なる誤であつて、もし利瑪竇を原本にとれば、前記した天明や嘉永に我國で飜刻された楕圓式の世界圖が出來る筈であり、其經線は曲らねばならないのであつた。それと全時にもし利瑪竇の圖が原本であつたとすれば、メガラニカ(後節にのべる)といふ大洲があるべきであるが、淨得寺の世界圖にはそれがない、但し北村氏の世界圖にはある。

利瑪竇の圖にはマゼラン海峽があり、オーストラリヤが非常に大きくなつてメガラニカとなつて

ゐる。しかるに淨得寺の地圖は全くこれを削除した。しかもマゼラン海峽はあるが濠太利亞の所に一寸「ネバギネア」としてニューギニア島を出してゐるに止まる。坤輿全圖南懷仁のものでさへ、南大陸メガラニカは記入してあるのに、大日本史料が慶長元和頃の圖だといふ淨得寺本にはそれがなくてオーストラリヤの所が海になつてゐる。

今座右の大英百科辭典をみると、ノバギネアは一五四六年 Ortiz de Retez(葡人)によつて命名されたものであるが、その後和蘭人のこの方面に來るものが多く、一五九七年には和蘭の歴史家 Wytfliet がネバギネアの南に大陸があるといふ想像をしるした。やがて一六〇五年にトレスがトレス海峽を通つてそれを慥かめた。しかし一七九二年(元祿五年)に Dalrymple が來て、オーストラリヤとニューギニアとの離れてゐることを確めトレス海峽の名をつけた以前に、この海は明でなかつた。其後一六一六にオランダのヂルク・ハートツグや一六二二年に同じくリユウキンの濠洲西岸の探見をへて、最後に愈オーストラリヤの南が明になつたのは寛永十九年タスマンの探見(一六四二年)によるのであつた。

さうした發見史を案ずれば、利瑪竇の圖はノバギネアの南に南大陸があるから、一五九七年前後の地理的智識であり、ノバギネアの南を海にしてゐるのは少くとも一六〇五年のトレス探見の報告があつた後の智識であるとせねばならぬ。

從つて淨得寺本のやうに利瑪竇のメガラニカ(南大陸)の大部分を地圖の上から取り去つて、之を不明にするといふことは、餘程後のことでなければならぬ。故に予はこの淨德寺本や北村氏本の世界

圖がメルカトル式に似ること、殊に淨得寺本の日本の形が餘程精確になつてゐるといふやうなこと(即後世の智識)及メガラニカを記さずして、たゞその形をのこすといふことや其他多くの點から全然利瑪竇の坤輿圖とは異つた出所のものであつて、全くオランダの地理學上の探檢智識によつたものと考へる。但し牧野氏も淨德寺本の南洋や日本等が、之をリッチマップに比して甚だしく正確であることに氣がつき、どうもこれは元和當時の海圖からつくつたものではないかと疑つてはゐられる。但し海圖でも日本の形は、慶長頃のもの、たとへば一五九八年南洋鍼路圖和蘭エダム製、東京博物館藏でさへ餘程變なものである。テレキによると日本の形は、一六五〇年(慶安三年)の Janszonius の海圖になつて、はじめて淨得寺本の程度の形になるのである。從つてこの圖の日本の島形のみからみても、家光將軍以後のものであるといつてよい。慶長から寛永などいふのは不當であると思ふ。否、それよりも遙に後世にこの圓柱投影法があちらで出來た(一七七二年)以後のものであらう。

オランダは通航一覽卷二百四十二、阿蘭陀國拜禮獻上の部をみると、寛文十二年(一六七二年)になつて、はじめて世界地圖を將軍に獻じてゐる。其時來たのはカピタン、ヨハンノスであつて、三月の上巳に、年始の拜禮として東上し獻上品二十種の中に、世界圖二つを差し出したのである。

さうしてこの世界圖は後世新井白石がみた所のものであつて「西洋紀聞」の中に、御府のオランダの世界圖を、オランダ人にみせたら、大に感心したとのべ、つぎに之を利瑪竇の圖と比較して、オランダの世界圖にはメガラニカがない理由として、

「されど阿蘭陀圖板には南方一帶の地はいまだ詳ならずして其地名をたてしにもあらず」

と論じてゐる。但しこのオランダ圖は兩半球圖であつた証左がある。從つてこの淨得寺本はこのオランダ世界圖に直接に從つたとはいはぬけれども、その地形といひ且つは南大陸があつたのを後にけしたらしい線が表示されてゐる點から見て、このオランダ圖の新らしさを眞似たものと考へる。但し不幸にして予は白石の見た世界圖を見ないから斷言はしない。約言すれば世界屏風の地圖はメルカトルに似て一部は元和頃の海圖に類似してゐても、決して利瑪竇の坤輿圖には一致しないものである。

從つて大日本史料や、牧野氏の考へるやうに、淨得寺の屏風は左程に古いものではない。寛文十二年以後(一六七二年)好事家が、オランダの智識を得て後之を世の中に分布したものであらうと考へる。猶この事については、いづれ後日詳論するの機會があるであらうと思ふ。

三、利瑪竇圖の由來

果して然りとすれば寶文十二年にオランダから世界圖を二つ献上し、白石が御府のうちから之を取り出して、西洋紀聞や采覽異言を著はす迄は、東洋ではこの利瑪竇の坤輿圖は世界智識のオーソリチーであつた筈である。白石は高官で御府所藏のものが見られたからこそ、萬曆版の坤輿全圖の誤を正すことが出來たけれども世上の多くの學者は、さうした新智識あるを知らなんだ、故に天明になつても、將又嘉永頃になつても、やはり外國地圖といへば、この利瑪竇の圖によつて、圖版をつくる外に途がなかつたのである。西川如見の華夷通商考でさへ地球萬國一覽之圖といふのを圖示

してゐるが、それもやはり利瑪竇を踏襲して、メガラニカを記してゐるのである。以てこのリッチマップの我國地理歷史上の位置を伺ふことが出來ると思ふ。

新井白石は如見とはちがつて、高官であり學者であり、蘭人について地圖の上で質問して紀聞や采覽異言を著はした。故に今日になつても、白石の云ふ所は利瑪竇以上に正確である。この事もいづれ後日機會を得て紹介することにしたい。右樣の次第であるから、リッチマップといふものは餘程貴重なものであると思ふので、筆を改めてこの圖のいつ頃出來たか、どういふ風に支那人の地理智識を變化せしめたかといふことをのべることにする。

バッドレー氏の研究によれば、利瑪竇は一五五二年十月六日伊太利の Macerata に生れたといふ新井白石の采覽異言によると利氏は廣東の南の香山縣で生れて、西洋に渡つて歸つたものだと記してゐる、これは支那にさういふ說があつたからであるが、利氏支那人說は一笑に附してよい。リッチは一五七一年にジェスイット教會に入つて、一五七八年三月二十四日に伊人教父ルッギエリ Ruggieri(羅明堅)と同船リスボンを出帆し、九月十三日印度のゴアにつき、ル氏はその翌年澳門についたが、リッチは後くるゝこと三年、一五八二年八月七日にマカオについた、これは後出の坤輿圖の中にある利氏の序文に壬午解纜東粵とあるのに一致する。萬曆壬午は十年で一五八二年である我國では天正十年本能寺の變のあつた年に、リッチは支那についた。當時其の先輩たるル氏は廣東總督と親交があつたので、一五八三年に廣東肇慶府に教會をたてることを許された、その教會の堂に世界地圖をかけてゐた所、之を見た支那人が大に感心し、やがて總督の命で利瑪竇が之を支那文

に飜刻した。その條リッチは支那を圖の中央にして改譯した。これが一五八四年の肇慶版である。利瑪竇はその後漢文に熟し著作もすれば渾天儀や、地球儀や、日晷計をつくつて大に支那の人士を教育した、リッチは其後一五九五年江西省南昌にゆき建安王の知遇をうけた。そこで一五九八年に始めて北京にゆき、翌年南京に歸つた、この時南京で吳左海の助力で再刊した。これが第二版である。ついで一六〇〇年に南京を去つて、翌年北京にゆき方物を神宗に獻じた、この際世界圖の第三版をつくつた。一六〇二年、即萬曆壬寅孟秋の記のあるアピアン式の地圖は實にこの版である。その後基督教徒たる支那人李保羅(恐く李之藻ならん)なるものが、教士の助力を行て第四版をつくつたといふ。予はこの四版を疑ふ。第三版既に李之藻の助力で出來てゐるからである。但しリ氏の自序錄によると支那人が竊に模刻したものが多かつたらしい。以上はブラッドレーの意見であるが、幸に京大本のうちに利瑪竇の自序がある、それを見る方が早くて且つ正確であるから今之を左に摘記する利瑪竇自身の云ふ所は左の如くであつて、李保羅の第四版なるものについては何等の言及がない、何となればこれが第三版であるからである。バッドレーはこの外に皇帝に奉つた第五版があるといつてゐる、これは予の見た裘氏の絹本のことであらうと思ふ。

吾古者以多見聞爲智。原有不辭萬里之遐、往訪賢人觀名邦者。人壽幾何、必歷年久遠而後得廣覽備學。忽然老至而無遑用焉、豈不悲哉。所以貴有圖史、史記之圖傳之四方之士所觀。見古人載而後人觀坐而可減愚增智焉、大哉圖史之功乎。敝國雖褊、而恒重信史。喜聞各方之風俗與其名勝。故非惟本

國詳載。又有天下列國通誌、以至九重天、萬國全圖無不備者。竇也跧伏海邦、竊慕中華大統万里聲教之盛。浮槎西來、壬午解纜東粤。粤人士請圖所過諸國以垂不朽。彼時竇未熟漢語、雖出所携圖冊與其積歲札記紬繹刻梓。然司賓所譯奚免無謬。庚子至白下、蒙左海吳先生(吳中明)之敎。再爲修訂辛丑來京諸大先生、曾見是圖者、多不鄙弃羈旅而辱厚待焉、繕部我存。李先生(李之藻)夙志輿地之學、自爲諸生編輯有書、深嘗茲圖以爲地度之上應天躔、乃萬世不易之法。又且窮理極數孜孜盡年不捨。歉前刻之隘狹未盡西來之原圖什一。謀更恢廣之。余曰此迺數邦之幸、因先生得有聞干諸夏矣敢不厪意再加校閱。乃取倣邑原圖、及通誌諸書。重爲攷定訂其舊譯之謬與其度數之失。兼增國名數百。隨其楮幅之空。載厥國俗土產。雖未能大備、比舊亦稍贍云。

但地形本圓、今圖爲平面、其理難干一覽而悟、則又倣倣邑之法、再作半球圖者二焉。一載赤道以北一載赤道以南。其二極則居二圈當中。以肖地之本形便干互見。共成大屏六幅、以爲書齋臥遊之具嗟嗟不出戶庭、歷觀萬國、此于聞見不無少補。嘗聞天地一大書、惟君子能讀之故道成焉。蓋知天地而可證主宰天地者至善至大至一也。不學者棄天者也。學不歸原天帝終非學也。淨絕惡蔬以期至善即善也。姑緩小以急干大。減其繁多以歸干至一干學也。庶乎竇不敏、譯此天地圖、非敢曰資聞見也爲已者當自得焉。竊以此盟于共戴天履地者、

萬曆壬寅孟秋吉旦、歐邏巴人利瑪竇　謹譔

即右の漢文によると、壬午即萬曆十年にマカオについた當時には竇いまだ漢語に熟しなかつたから初版には誤譯があつた。そこで庚子(萬曆二十八年)になつて白下(今の金陵、江寧府)即南京に行

き吳左海の助力を得て第二版をつくつたといふ、この事はブラッドレーには Huzohai の請によつて訂正したとかいた吳左海(フッオハイ)である。ついで辛丑萬歷二十九年(一六〇一年、我慶長六年にあたる)北京にゆき李之藻の激勵を得て、はじめてこの壬寅孟秋版をつくり、誤譯を改め、國名をまし、空白の所に地志の大體をしるし、はじめてこの書の完成した所以をのべ、大なるアピアン圖の外に、極を中心とする兩半球圖二をいれた理由をしるしてゐるのである。

かうした天地を知つてはじめて天地を主宰する全能の神を信ずるに至るべきことを說いてゐるのも面白いではないか。

バッドレー氏の報告よりも、この一篇の自序の方が、本圖の由來を明にすると思ふからこゝにこの全部をかゝげたのである。(未完)

日本地圖に適應したボンヌ氏斜軸投影圖法(三)

丸山　隆　玄

V　斜軸投影における ボンヌ圖法について。

斜軸投影とて特別の圖法があるのではなく、正軸投影における、經緯線の代りに、新しい極に對する方位線、及び等距圈を、經緯度の代り新しい極に對する方位と、新しい極に對する赤道からの緯度とを用ひて、正軸投影と同じ圖法により描かれる。それで序論に述べた通りに、歪の値につい